

出来事ファイル (No.22-1)

■2月1日から南京町春節祭

南京町では2月1日(火)・4日(金)～6日(日)まで、旧暦の正月を祝う恒例の春節祭を開催する。南京町の正面入り口になる長安門には横断幕でPRするほか、広場を中心に中国の赤色提灯で雰囲気盛り上げる。ステージでは東京中国歌舞団による変臉や雑技で来場者を楽しませるほか、関帝さま祭壇への一般参拝、おみくじやポチ袋のほか占いなども。



変臉(2020年版春節祭イベントガイドより)

■元町北通に新バナー登場

1丁目から3丁目に至る元町北通には、宮崎みよしさんデザインのバナーが掲出されてきた。バナー掲出から年月を経、変色や痛みがみられるようになっていたことから、3丁目自治会ではJRAウインズ神戸の協力を得、朱色をベースにした独自のデザインで「元町北通」のバナーを制作、このほど同丁内の全街灯に掲出、3丁目に彩りを添えている。



■クリーン作戦レポート

12月1日(水)、もともちハーバー懇談会では例月のクリーン作戦を実施した。当日はエスタシオン・デ・神戸、ネットヨタ㈱に加え、NPOあいあいネット神戸を窓口にしそがみ障害者相談支援センターのみなさんが加わった。



エスタシオン・デ・神戸チーム



ネットヨタチーム



NPOあいあいネット・いそがみ障害者相談支援センターチーム

□読者プレゼント イスラエル博物館 印象派・光の系譜 —モネ、ルノワール、ゴッホ、ゴッガン

古代から現代まで、50万点にのぼる文化財を所蔵するエルサレムのイスラエル博物館。モネ、ルノワール、ゴッホ、ゴッガンらの全盛期の傑作を中心に、その前後のバルビゾン派からナビ派までを含めて一堂に展示、外光から内なる光へと向かっていった画家たちの「光の系譜」をたどる展覧会です。観賞ご希望の方は、はがきに住所、氏名、年齢をお書きの上、編集部まで。先着順で2名の方にペア招待券をお送りします。

会場：あべのハルカス美術館
(休館日：1月31日・2月7日)
電話：06-4399-9050



神戸元町商店街 楽市楽座 情報 1月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

1月14日(金)～1月17日(月)
総合学園ヒューマンアカデミー神戸校
デザインカレッジ進級卒業制作展
(展示15日(土)・16日(日))
1月20日(木)～1月25日(火)
ろうきん公募写真展

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

12月18日(土)～1月 7日(金)
『偶然と想像』
1月 1日(土)～1月 7日(金)
『ペイビーわるきゅーれ』
『最強殺し屋伝説国岡』[完全版]

1月 1日(土)～1月14日(金)
『わが心の香港 ～映画監督アン・ホイ』
1月 1日(土)～1月21日(金)
『ただ悪より救いたまえ』
1月 8日(土)～1月21日(金)
『屋根の上に吹く風は』
『BELUSHI ベルーシ』
1月15日(土)～1月21日(金)
『POP!』『JOINT』
1月22日(土)～1月28日(金)
『息をするように』『少女邂逅』
1月22日(土)～2月 4日(金)
『茲山魚譜 チャサンオボ』
『ボストン市庁舎』
【予定は変更になる場合がございます。】

編集後記

あけましておめでとうございます。▼パチンコ店進出を機に、元町通・栄町通・海岸通という、それぞれに異なった顔をもつ地域を対象に結成された弊協議会は、30年の歩み、神戸をはじめの街のまちづくりの記録を節目に、31年目を迎える。▼神戸市との意見交換をかさねた鯉川の地域内南北道路整備、阪神の地震による建物倒壊がもたらしたマンション中心の新築物件への対応と街なみ整備。アーケードで囲われた商店街でも、上階をマンション型の建物とする案件で、ぎわい、昨年暮れ、商店街西端のハーバーロードに面した旧ホテルシエレーナの再開発にもめどがたつた。▼ことしもよろしく願います。



栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、12月10日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目協和会)奈良山喬一、(㈱イーエスプランニング)藤原達也・川田隼世、(石倉デザイン)石倉伸吾、(株式会社KKテクノ)久保友良寧・池田雅幸、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(神戸市)西山昌樹、(㈱神明)上杉栄治、(神明倉庫㈱)十時実希・(走水神社)児嶋英毅、(兵庫県信用組合)藤本吉英・足立英則・林幸司・三野健太郎・宮永結菜・井上博之、(広島銀行)曾我部真介、(新光明飾㈱)中川俊・西村友博・藤田直之・大森貴美子、(佐田野不動産㈱)佐田野宏之、以上、23名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



みなと元町

タウンニュース

TOWN NEWS



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

「まち」は何でできている？ 映画『ボストン市庁舎』より

元町映画館 支配人 林 未来



「まち」は何でできているのか？まず第一に、“ひと”。当然ながら人間がいなければ街は成り立たない。まちづくりに関わる人たちならば、それは“建てもの”であると言うかもしれない。街をかたちづくる建造物たち。そこには人の営みがあり、暮らしがあり、文化がある。だが、人がいて生活がある…それだけではそこはまだ「まち」ではない。では、「まち」を「まち」たらしめているものは何なのか—それは、“政治”である。

映画『ボストン市庁舎』は、アメリカのドキュメンタリー作家フレデリック・ワイズマンの最新作である。「世界で最も偉大なドキュメンタリー作家」と称されるワイズマンは、精神異常犯罪者のための州立刑務所マサチューセッツ矯正院の日常を克明に映し出した『チチカット・フォーリーズ』(1967年)で監督デビューし、その後も様々な角度からアメリカ社会や組織の構造を見つめるドキュメンタリー作品を発表。この号が発行される2022年1月1日に92歳の誕生日を迎えるのだが、バリッパリの現役で精力的に作品を生み出し続けている。



そんなワイズマンが新たに挑んだ被写体は、生まれ故郷であるマサチューセッツ州のボストン市庁舎。アメリカがたどってきた多様性の歴史を典型的に示すような人口構成をもつ大都市ボストンの市役所の活動を見せることで、「人々がともに幸せに暮らしてゆくために、なぜ行政が必要なのかを映画を通して伝える」ことを目指したと言う。

軽やかに、飄々と市庁舎内や街を駆け回るカメラに映し出されるのは、警察、消防、教育、防災、医療、貧困、差別など、数百ものサービスを提供し問題に取り組む市役所の仕事の舞台裏だ。サービス向上を図り、問題課題の解決に取り組む、市民たちの暮らしの地盤づくりに力を注いでいる。映し出される彼らの働きぶりを見て驚いたのは、その仕事の大半は“話し合い”なのではないかと思われるディスカッションの多さだ。いたるところで率直に意見をぶつけ合い、ともに解決のための道筋を議論しながら探ってゆく姿を目にする。

ワイズマンは事前リサーチをしない作品づくりで有名だ。題材を決めると、現場に赴き、自身の関心の動くままにカメラを向けてゆく。「この題材はこう撮って、こういう場面を入れて、最後はこのように締める」とあらかじめ決めた構成をゴールとして完成させるテレビドキュメンタリーとは正反対の作り方である。そして膨大な撮影素材とじっくり向き合い、編集していく中で

テーマ性が浮かび上がってくるのだという。本作を観て「市の仕事のメインはディスカッションなのか」と感じるということは、ワイズマンの目線、伝えたいことがそこにあるということだ。撮影が行われたのは2018～19年、トランプ政権下。つまり、分断化が急速に進んだアメリカにおいて、「こ

れが民主主義だ！」と声を上げた映画なのである。

大都市ボストンのリーダーは、アイルランド移民のルーツを持つ労働者階級出身のマーティン・ウォルシュ市長。「都市が変われば国を変えてゆく」と語る姿にワイズマンはアメリカ民主主義の根幹を見出し、「市民のための市役所」の可能性を希求する。「ボストン市庁舎はトランプが体現するものの対極にある」ともワイズマンは語っている。

政治により、まちの姿も性格も変わってゆく。2021年1月にトランプは退任、ウォルシュはバイデン政権下でアメリカ合衆国労働長官に抜擢され、ボストン市長の職を辞した。ウォルシュ辞任後に市長代行を務めたキム・ジェイニーは黒人や女性として初めて市長職務を担う存在となり、新市長に選ばれたのは有色人種や女性として初となるアジア系のミシェル・ウー。この市長選はすべての有力候補が有色人種、さらに大半が女性である異例の展開だったが、それもウォルシュの実践した政治がまちを変えていった好例と言えるだろう。



海という名の本屋が消えた（98）

平野義昌

元町駅周辺(4) 学校その4

若杉の神戸暮らしを見る。私生活では、1932(昭和7)年再婚(補註1)、33(昭和8)年と35(昭和10)年に女兒が生まれた。

文学活動では、33年亀山勝編輯の同人誌「内部」、34(昭和9)年同「風神」に竹中郁らと参加。いずれも「庭與吉」名(補註2)。37(昭和12)年、文学同人誌「文藝首都」(補註3)神戸支部が発足し、加入する。

神戸小学校では主に高学年の担任だったが、3年生女子を受け持った時のこと。体操の時間や放課後、諏訪山によく登った。急な斜面を上り、藪に飛び込み、子どもたちも果敢についてきた。ある日、道に迷ってしまう。馴染みの建物は見えているが、錯乱した。危険な場所では一人ずつ抱き上げた。必死だった。窮地を脱して「言いがたい寂しさ」を感じた。空も風も光も風景も音も、すべて「もとのまま」である。怖がっていた子どもたちも普通に戻っている。ほんの偶然で助かる、偶然で助からない。「偶然というものとは凡そそうしたものだ」と思った。註1

一方、国家の権力は標的を狙う。日本は中国大陸で戦火を広げ、国際連盟を脱退して国際的に孤立。国民の自由を制限する。左翼運動家、学者、言論人、宗教人、芸術家から一般市民まで弾圧する。作家・小林多喜二が特高警察内で虐殺されたのは33年のこと。

若杉は、警察署玄関を飾るフクロウの彫刻の目がだんだん自分に迫ってくる、とを感じる。「文藝首都」例会に異質な人物が参加して来る。「三宮高等警察」の名刺を出す。上の命令で来ているだけ、役目だから、と丁重である。それでも目障り、気障りだ。学校には若杉の交友や読書傾向について問い合わせがあった。教頭は気にする必要なし、と言う。兵庫県庁勤務の文学仲間・及川英雄(1907～75年)に訊ねた。曰く、身に覚えがなくても警戒しろ、警察は何もなくても調べる権利を持つ、三宮警察が1週間拘留して調べ釈放する、次は葺合警察、須磨警察、菊水警察……、一回路したらまた三宮警察……「タイ回し」で追い詰める、と。若杉は危ないと思われる本2冊、死刑囚の手記と本願寺の内紛ルポ(書名に「搾取」の文字)を隠した。註2

40(昭和15)年2月「京大俳句事件」、前衛俳人たちが治安維持法違反容疑で逮捕される。続いて3月「神戸詩人事件」、詩誌「神戸詩人」同人たちと姫路高校の文化サークルメンバーが一斉検挙される。懲役2年から5年、執行猶予がついた人もいるが、断筆を強制されて出獄後に自殺した人も。戦後、特高警察によるでっち上げ事件と判明している。

〈少数だが、共産主義者がいた。シュルレアリスムを研究、自由な精神を学ぶ青年がいた。だからほとんどは、純粋に詩作、思索する文学青年だった。〉註3

県警は「文藝首都神戸支部」も左翼文化運動団体としてマークしていた(註4)。若杉が助かったのは偶然か、権力の気まぐれか。

41(昭和16)年3月、若杉は14年勤めた神戸小学校を退職。同年、小学校が国民学校と改称される。〈常識では判断のつかぬような規則がぎっぎに出された。たとえば「運動会」といつてはいけない、「体育会」と言えというのがときである。県庁本庁舎のまんにいたので、徐州、漢口が陥落したのも、日独伊防共協定が結ばれたのも、ヒットラーユーゲントが来たのも、歴史の足取りをまるで肉眼で見えるがごとくであった。〉註2

退職半年後、若杉はカトリックの私立女学校(下山手通7丁目にあった高等聖家族女学校と

思われる。戦災で廃校)講師になる。同年、「文藝首都」11月号に「若杉慧」の名で随筆「断蓬」を執筆。内容は不明ながら、ようやく「若杉慧」にたどり着いた。この年12月16日、日本は太平洋戦争に突入した。

42(昭和17)年、「微塵世界」(「文藝首都」同年1月号発表)が第15回芥川賞の予選候補に入る。山村を舞台に、少年少女の受験・進路を扱う。親の望みや学校・村の威信が子どもたちを縛るが、それぞれの知力・体力・希望に合った道がある。彼らは自分で見つける。題名は浄土和讃から。阿弥陀如来はすべての人に目を注いでいる。

43(昭和18)年、神戸成徳高等学校(現在神戸龍谷中学校高等学校)に勤務。

同年、「淡墨(たんぼく)」(「文学界」9月号(写真))が第18回芥川賞最終候補作に残る。選考委員の評価は受賞作(東野邊薫「和紙」)に次ぐものだったが、残念。「淡墨」は「神戸事件」(備前藩行列を居留地外国人兵士が横切り、紛争。国際問題に発展)が題材。英国書記官の手記(創作)を中心に、明治新政府の外交交渉、藩士・瀧善三郎切腹を描く。題名は瀧が遺書を書いた墨を表わす。

44(昭和19)年の第19回芥川賞でも「青色青光(しょうしきしょうこう)」(「文学界」3月号)が予選候補に入った。戦場で負傷し失明した男が帰郷、農夫として生きると決意。題名は阿弥陀經の文言から。「黄色黄光(おうしきおうこう)」「赤色赤光(しゃくしきしゃっこう)」の三部作になる。一人一人に色があり輝く、の意味。お経は「白色白光(びやくしきびやっこう)」と続くので、続編を考えていたのかもしれない。

若杉作品に垣間見える仏教思想はお寺の日曜学校で優等生だったことによる。

同年、家族と妻の実家(広島県の島)に疎開し、国立広島商船学校(現在国立広島商船高等専門学校)勤務。45(昭和20)年、神戸の家は空襲で焼失。文学仲間・白川渥が「貴宅やられ、界限一樹の凭るべきなし、風呂釜一つ転っている」と知らせてくれた。註2

46～47(昭和21～22)年、「朝日評論」に青春小説『エデンの海』を連載、単行本はロングセラーになった(補註4)。48(昭和23)年、商船学校辞職。理由は、筆一本で食える、と思ったからではない。教師の常識道徳では世の中の真相真実はつかめない、と考えた。そして、自由に表現できる時代になったこと。本・雑誌が増え、田舎にいても原稿の注文が来る。すると教師の仕事が苦痛になってきた。

小説が世間の評判を得るが、自分では気に入らない。その理由もわかっている。「戦後派」作家たちは戦場で肉体的にも精神的にも傷を負っている。自分は戦争に行っていない。師範学校時代に入隊訓練を受け(瘦せすぎのため免除されそうになった)、生徒と飛行機工場に勤労働員されただけだ。

〈……私がこの人生において、是が非でも、いますぐ、口をしばられても、ペンを取り上げられても、土に穴を掘ってでも言いたいほどの命題を持たなかったということと係わりがあるのかもしれませんが。〉註1

生活のため出版社と読者に求められるものを書いてきた。面白い大衆小説は書けないし、純文学には足りない。「鶴的いわゆる中間小説の域」を出ない。「道草」だと思う。

53(昭和28)年頃から、若杉は野の仏や墓など民俗学に関心を向ける。カメラを携え旅に出た。元々好きだった長塚節(1879～1915年、歌人・作家)の紀行文を愛読した。長塚は若い頃から

ら旅をし、歌を詠み、文章に残した。咽頭結核を抱えていた。芭蕉のごとく「旅に病んで」、九州帝国大学医科大学(現在の九州大学医学部)付属病院で亡くなった。

若杉は全国を巡り、石仏・石塔の写真集や評論を出版する。長塚の旅の跡も追った。教師も小説も仏教もカメラも、「どっちを向いても中途半端」。この道ひとすじに精進すべきか、思うまま泳ぐのか、「必至の命題」になった。たどりついたのは「無我」という考え。我を無くすることではなく、我にとらわれるな、ということだと気づく。

〈……それなら何者になるか、何者でもない、現在在だいま、いちばん歩きたい方に歩いている人間に御座候といえるようになったら、どれだけのしいだろうかという気がしました。〉註1

1970～74(昭和45～49)年に同人誌「日暦」などに発表した長塚節評伝「長塚節素描」が好評を得る。75(昭和50)年、第3回平林たい子文学賞(評論部門)を受賞。

若杉は幼時から仏教の教えに親しんだ。青年期には心身の苦悩を抱えた。文学を愛した。教育者として真摯に生きた。作家として迷いながらも「命題」を見つけた。石仏・墓を巡り、有名無名の人びとの死を思い、書いた。

補註1 若杉慧『愛の静脈』(大日本雄弁会講談社、1955年)は舞台を戦後の広島にして亡き妻とのことを描いている。小説では語り手の教え子が二番目の妻になるが、これは事実と思われる。

補註2 ベンネーム「庭與吉」。「庭」は若杉が考えた。師範学校からの親友に命名を頼むと、「與吉」と。長塚節『土』主人公の子の名前。

補註3 1933(昭和8)年保高德蔵が「文藝首都」創刊。顧問、広津和郎、直木三十五、谷崎精二、宇野浩二。当初、保高と有志のカンパで運営。36(昭和11)年同人誌制に。37(昭和12)年関西各地で作家たちが講演会開催。70(昭和45)年終刊まで多くの作家を輩出。芝木好子、大原富枝、北杜夫、田辺聖子、佐藤愛子、中上健次他。『保高德蔵選集』(新潮社、1972年)より。

補註4 47(昭和22)年単行本が文化書院から。3度映画化。50(昭和25)年松竹、鶴田浩二・藤田泰子主演、63(昭和38)年日活、高橋英樹・和泉雅子主演、76(昭和51)年東宝、南条豊・山口百恵主演。

註1 若杉慧『半眼抄』 木耳社 1972年
註2 若杉慧『須磨・明石・六甲の旅』 秋元書房 1961年

註3 季村敏夫『窓の微風 モダニズム詩断層』みずのわ出版 2010年

註4 及川英雄『暗い青春』 豆本灯の会 1987年
その他参考資料 Web「広島文学資料室」
引用文は適宜新字・新かなに改めた。



「文学界」1943年9月号

みなとMIO MACHケンチクさんぽ

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

vol.6

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

海岸ビルディングと私と

海岸通3丁目に建つ海岸ビルディングは、この沿岸部にありながら阪神・淡路大震災(1995年)を生き延びた貴重な明治の近代建築(1911年、明治44年竣工)です。

私は地震をはさんだ7年半(1993年～2000年)、このビルの3階にある建築設計事務所に勤めていました。学生時からアルバイトで出入りしていたので実際はほぼ10年。旧居留地内の海岸通6番地に建つ「海岸ビルディング(1918年、大正7年竣工)」と名前が似ているので、仕事で来られる方が間違うこともしばしば。どちらも「国道2号線に面する海岸通の海岸ビル」には違いないので、「ちに点々の方」「旧居留地でなくともっと西」と説明していました。ただ、竣工時は兼松商店(現株式会社兼松)の兼松房治郎が建てた「日豪会館」という名称であり戦後、別のオーナーに渡って「海岸ビルディング」に。一方、「海岸ビルディング」の方も、最初は「三井物産神戸支店」でした。

このふたつの「海岸通の海岸ビル」は、いずれも河合浩蔵という設計者の手によるもの。「東の海岸ビルディング」は震災後ファ



窓周りに特徴的なキーストーン風デザインが施され重厚な南側ファサード



東側の路地奥に佇む同ビル(正面3階が「いるか設計集団」)



3階ホールから大階段を見下ろす(左手が「いるか設計集団」)



日々上り下りした北側の鉄骨階段

ガス、水道が止まっていた頃。事務所のスタッフの過半は大阪に設けた仮の拠点で仕事を続けましたが、事務所より西に住む私を含む3人はここで留守番しながら仕事することになりました。また、一緒に仕事をしていた構造設計事務所が入居している建物が全壊したため、空いたスペースにしばらく引っ越してこられました。構造家の彼が設計した建物はどれも無事だったのですが、街中の建物が壊れたことにとても胸を痛めておられ、ここでお酒を飲みながら泣いておられたことがありました。そんな、暗い、寒い、まだ揺れる中、ここに神戸市の方が「仕事できるか?」と飛び込んで来られたことも昨日のように思い起こされます。これがその後、神戸の観光の顔である異人館修復の仕事になり、それを担当した思いから北野に自分の事務所を構えることになり21年が経ちました。勤めていた「いるか設計集団」(変わった名

会社があり、お昼休みになるとその前の細い路地で力自慢の従業員の方たちが2手に分かれて本格的な綱引をしていました。おそらく競技に出られていたのだらうと思いますが、この頃、路地の突当りになる1階にカフェが入居しました。構造体である煉瓦の表情が見えるように、オーナー自ら幾日もかけて内壁の仕上の漆喰をけずっておられました。今ではすっかり人気のスポットになっています。

建物の内部、廊下までは古い佇まいのままでしたが、一步事務所に入ると薄いピンクの壁と淡い水色に塗られた天井、アクセントカラーで仕上げられた本棚等々で、こんなふうに古い建物を生かすんだとプロの手法に感心した記憶があります。借りていた2つの部屋の間の壁を人が通れる大きさに穴を開けてそのままでしたから、壁の厚み50cmぐらい、煉瓦積みが露出しておりました。天井も高く4mほどでしたでしょうか、そこから長く吊り下げられた蛍光灯の下で製図板(手書きの時代です)に向かう毎日でした。

前ですが設計事務所です。)は今も同じ3階の一角にあります。恩師の有村さんは昨年ご病気で亡くなりました。40数年、ここに拠点を置き神戸の近代建築を見守り続けてこられ、私を含め多くの建築人を育てられました。今でもあの重い鉄のドアのむこうにもらえる気がしてなりません。私だけでも数多くの記憶がここにあります。神戸の歴史を生き抜いてきたこれらの建築は、そういった数多くの人の記憶が積み重ねられて今に至っています。記憶に残る建築を次の時代に引き継ぐために少しでも力になればらとの思いで、日々、仕事に取り組んでいます。



長尾 健 (ながおけん)
長尾健建築研究所 代表／
(公社)日本建築家協会 前兵庫
地域会長